
Arf～アルフ～

amichi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A r f ｝ アルフ

【Nコード】

N 8 4 5 3 T

【作者名】

a m i c h i

【あらすじ】

超大国サラ王国。そこではかつてないほどの繁栄を見せていた。しかし、その平和は一瞬で崩壊した。

『落ちこぼれ』と呼ばれる第三王子ボルスもその混乱に巻き込まれ、その中で「自分」を見つけていく。そして、この混乱が意味するものを知る。

第1話

「王様！王妃様の陣痛が始まりました！」

それは超大国サラ王国の宮殿から起こった。
そして、その影響は波紋のように広がる。

イベルア、そこはサラ国が存在する世界を含む、多くの世界をつなげる中心世界。

「指揮官！！」

イベルアの中心である者、指揮官は突如崩れ落ちた。隣にいた副指揮官が彼の体を受け止める。

「やっと来たか……」

指揮官は小さな声でつぶやいた。

どれほど待っていただろうか。何百年、何千年とこの日を待ち望んでいた。

宮殿では王妃の苦痛の叫びが響く。国王は手を組んで天に祈る。

「頭が……！王妃様、もう少しです……！」

産婆の侍女たちが慌ただしく動く。王妃はありったけの力を込める。
出産は間近だった。

指揮官の周りには多くの仲間たちが集まっていた。

「やっと…」アルフ」がやって来た…」

指揮官は充実した表情を浮かべる。

もうそろそろで、待ち焦がれていた最期を迎えることができる。そう思うと喜びの感情が湧く。一方で、副指揮官を含む大勢の仲間たちは目に涙を浮かべていた。

「…ディストス」

副指揮官の名を呼ぶ。

「はい」

副指揮官、ディストスは震える声を抑えて答える。

「これから…大変な苦勞が…あるだろう…」

指揮官の声は聞き取るのも難しいほど弱弱しくなっていた。

指揮官はディストスの手を触れる。ディストスはその手を強く握った。

「後は…頼んだぞ…」

「はいっ…」

ディストスの答えを聞き、そして周りの仲間を見た。

「みんな…彼を…頼む…」

「はいっ」

その声を聞いて、指揮官は満足げに微笑んだ。

そして、眠るように静かに目を閉じた。

それと同時に

大きな産声が上がった。

第2話

サラ王国。その国は世界の三分の二を占める領土を持つ超大国である。

この国で第三王子が誕生してから5年。作物は毎年豊作で、漁業でも大漁でなかった年はない。サラ国はかつてない繁栄の時代を迎えていた。

サラ国の首都サラディア。その北端にそびえる巨大な城に一人の男がやって来た。門の前まで来て、門兵に止められる。

「やめろ」

門の内側から威厳のある声が聞こえた。門兵は即座に男の前から退いた。

「ダウリュエス国王、お久しぶりです」

男はやって来た国王に頭を下げる。

「久しぶりだな、クイン」

国王ダウリュエスは旧友のクインにを自らの執務室に案内した。

二人は執務室に入る。扉が閉まるのを確認してクインはダウリュエスに口を開く。

「三人の王子は元気か？」

「ああ」

ダウリュエスは真ん中にある椅子に座る。反対側の席に座るようにクインに促す。それにしたがってクインは椅子に座る。侍女が茶を持ってきて、机に静かに置く。

クインは王と二人きりになると敬語は使わない。彼は王の何倍もの

年月を生きる“精霊”である。精霊とは、サラ王国のある世界と隣接した世界から来た者たちを指す。彼らは自然そのものであり、基本は不老不死である。クインはサラ王国建国以来からサラ国王を支えてきた。そのため、クインとダウリュエスの関係は主従ではなく、親友としてであった。

「今日はどうしたんだ？」

クインは茶を一口飲み、真剣な表情をしてダウリュエスを見つめる。

「なんか、おかしくないか？」

「…どうということだ」

ダウリュエスは訝しげに顔をしかめる。

「この5年間：第三王子が生まれてから、不自然なほどに世界が豊かだ」

「…そのことか」

ダウリュエスも薄々気がついていていた。

―あまりに豊かになりすぎている。

まるで他のところから栄養を奪っているかのように―

「ボルスが生まれてから…か」

その言葉が気にかかる。たしかに、この繁栄は第三王子ボルスが生まれた年から続いている。

「何か関係があると思うのだが、ボルス王子の身の回りで何か起こっていないか？」

ボルス王子という存在は、何かを示しているのかもしれない。クインはそう考えた。今日ここに来たのは、それを調べるためだった。

ダウリュエスはボルスに関する記憶をたどった。一番大きな出来事は、王妃の死である。ボルスの出産はかなりの難産だった。数時間を経て王妃はボルスを生み、力を使い果たしたかのように息を引

き取った。

しかし、それから五年がたった今、ボルスの周りで何かが起こったことはない。

「そうか……。やはり、気のせいなのだろうか」

クインは考え込んだ。気のせいであれば一番いいが、自身の中では何かがあるという、根拠のない、確信に近いものが存在する。

すると、扉のほうから侍女のあわてた声が聞こえた。

「王様！王子様たちが……」

ダウリュエスは立ち上がった。扉に早足でいき、扉を開ける。

「何があった？」

「リオン王子様が、ボルス王子様に……」

その言葉にダウリュエスはため息をつく。

「また喧嘩か……」

「喧嘩はほっといたほうがいいぞ。自分たちで解決させなきゃ意味がない」

クインが後ろから口を挟む。侍女はまた口を開く。

「リオン王子様が剣をお持ちになって……」

「あの馬鹿が……っ」

侍女の言葉を最後まで聞かずにダウリュエスは走り出した。

クインは一人になった部屋で茶を一気に飲んだ。

「お父さんは大変だな……」

ため息をつき、クインはダウリュエスの後を追って部屋を出た。

第3話

中心世界イベルア。その世界を支えていた指揮官を失った直後から、奇妙な事が起こっていた。副指揮官デイストスは、険しい表情で窓からその様子を見ていた。

イベルアは数多くの世界と結ぶ中心世界。それぞれの世界とは扉で繋がっている。奇妙な現象はその扉から起きていた。

誰の目でも見ることでできるほど強いエネルギーが、扉から漏れだしている。そして、それはあるひとつの扉に集まっていた。

世界は生きている。生き物と同じように。

扉から漏れ出すエネルギーは、いわゆる世界が生きていくのに必要な生命力である。

「これはやばいよねえ」

背後から声が聞こえた。

「…ラドン」

振り返ると、いつの間にか補佐官のラドンが部屋の椅子に座って紅茶を飲んでいた。

「勝手に部屋に入って、勝手に人の紅茶を飲むな」

「……最初に言う事がそれかい？」

デイストスも椅子に座り、呆けるラドンからカップを取り返す。

「…砂糖まで入れやがって」

透き通って見えるカップの底には溶けきれなかった砂糖が沈殿していた。

「そんな話は後でいいでしょー?」

ラドンは笑ってごまかす。そして次には打って変わって真剣な表情に変わった。

「どうする?」

ディストスは鋭い目付きをラドンに向ける。

「絶対に“アルフ”があの世界にいるよねえ?」

「…間違いなくな」

ラドンは机に肘を付き、ディストスに顔を少し近づける。

「オレが行こうか?」

ラドンの表情は笑顔であったが、目付きは真剣だった。ディストスは立ち上がり、窓から外を見る。

「いや、私が行こう」

「副指揮官が?」

意外な答えに目を丸くした。

「力が集まっているのは、サラ国の世界だ」

ディストスは振り返ってラドンを見る。漆黒の髪が陽の光で輝く。

「あの世界なら、私は思い通りに動ける」

中心世界イベルアがサラ国に爪を立てるのはそれから17年後であ

った。

第4話

世界の三分の二を領土とする超大国サラディアでは、朝から賑わいを見せていた。サラディアの西に広がる巨大な鍛冶工房では鉄を叩く音が絶え間なく鳴り響く。

「ボルス！薪を入れてくれ！」

鉄を叩く音に負けない鍛冶職人の声が響く。

「はい！」

呼ばれた雑用の青年、ボルスは薪を持って走る。左耳につけた金色の大きなリングピアスが動作に合わせて動いた。その職人のもとへと行って、かまどに薪を入れていく。入れるたびに火の粉が舞った。

「ボルス！こっちも頼む！」

「はいっ！」

休む暇もなく他のところへ走っていった。

サラディアの鍛冶工房は、サラ王国にとって心臓部のようなところである。世界中から腕のいい職人が集まり、武器から建築物の材料まで作っている。

サラディアは山に囲まれた場所に位置し、大きな交通路は一箇所しかないという、貿易に関しては不利である。しかし、山を超えたところに世界一の商業都市ルーマがあり、サラディアとは加工貿易でつながっている。鍛冶工房は、加工業の中心部であった。

火がごうごうと燃えるかまどの中に薪を入れて火の調節をする作業を、ボルスは太陽が出てからずっと行っていた。金色の髪が汗で貼りつくのを払って真剣にやる。日は頭上に移動していた。

昼になり、工場の者たちは近くの広場などに出て昼食をとっていた。ボルスも仕事に区切りをつけて工房を出る。

「ボルス！」

後ろから名前を呼ばれた。

「はいっ」

条件反射で返事をして振り返ると、そこには腹を抱えて笑っている男がいた。

「デンサスカよ」

デンサスはひと通り笑って、ずれた眼鏡をかけ直しながら顔をあげる。

「素直だなあ、相変わらず。飯食おーぜ」

デンサスはボルスの分の弁当を持ち上げた。

「おっ、ありがと」

その弁当を手にとって笑った。

鍛冶工房地帯の端。街の広場に面した積み荷置き場で、ボルス達雑用の同僚が集まって昼食をとっていた。

「オレは右だ」

「いいや、左だ」

「真ん中は？」

「「それはない！」」

デンサス含む5人の青年たちが積み荷の隙間に所狭しに集まっている。ボルスは彼らから一步下がって荷台に腰掛けて弁当を食べる。

ふと見上げると、積み荷によって区切られた景色からサラ城が見えた。

サラディア全体を見下ろすように建つサラ城は、サラ王国の中心であり、ボルスの生まれたところであった。

父親である国王ダウリュエスの命令で、強制的に工房に入れられてから二年が経つ。同僚たちから、最初は王子として見られてぎこちない関係だったが、デンサスのおかげで、今では仲間として受け入れられている。

デンサスは、工房に来て初めてできた友であった。寝所が一緒ということもあり、仕事以外でもいつも共にいた。

「おいボルス！お前、ひとりで弁当食ってんなよ！」

呆れた顔でデンサスを見る。彼らの視線の先には、雑貨屋の店頭で品を見ている女性たちがいた。彼女らの後ろには使用人がひとりいることから、どこかの貴族であろう。ボルスは再び弁当に視線を戻す。

「…右だな」

ポツリとつぶやいたボルスを、デンサスらは目を丸くして見る。

「なんだよ、ちゃっかり見てるじゃないか。クールに気取ってるなよ」

デンサスがニヤニヤしながら隣に座り、肩を組む。周りの同僚は大声で笑った。

「ほら、こっち来いっ」

「ちよっ」

ボルスは弁当を持ったままぐいっと引っ張られる。

隙間から見える女性たちは、丁度店を去る所だった。

「あ…」

去り際に使用人の女性がこちらを向いた。ボルスは思わず声を漏ら

す。

「どうした!？」

ボルスの反応に5人が食いつく。ボルス突き飛ばして一斉に隙間をのぞく。突き飛ばされたボルスは弁当をこぼさないようにしながら積み荷に激突する。上から荷物が落ちてきた。

「なんだよ。何もねえじゃないか」

彼らはがっかりした顔でボルスの方に振り返る。

「なに期待してるんだよ」

積み荷から這い出る。幸い弁当は無事だった。

「オレはてっきり風でも吹いたのかと…」

「変態め」

冷たく言い放って弁当の残りを食べ始めた。

すると、工房地帯の中心から鐘を叩く音が聞こえた。午後の作業開始の予鈴であった。

「やべっ」

デンススらは急いで弁当を胃に詰め込む。その様子にボルスは笑った。

いつものように平和な日が送られていった。

第5話

サラディアを見下ろすように建つサラ城。その庭では様々な階級の貴族たちが栄華を目に映すような優雅な時を過ごしていた。

そのなかで、一人だけ厳しい顔をして歩いている者がいた。深い紺色のマントをはためかせて歩く姿は凛々しく、誇り高い獅子のよくな雰囲気をまとっている。彼の姿を見ると、貴族たちは皆頭を下げた。

彼はサラ王国第一王子リオン。次期王の資格を持つ王太子である。

彼は足早に王の執務室に向かう。通り過ぎる兵たちは皆敬礼の姿勢をとる。

リオンはサラ王国の軍事をまとめる総將軍でもある。その厳しさと統率力から、兵たちに全幅の信頼を置かれている。

執務室の前に着きドアを軽く叩く。すると王の近衛兵がドアを開ける。そしてリオンと確認して敬礼の姿勢を取り、王に伝える。

「入れ」

奥から王の声が聞こえた。その声に従い、リオンは中に入った。王ダウリュエスは書類に向いていた顔を上げる。リオンはダウリュエスに一礼した。

「父上に折り入ったお話があるのですが、よろしいでしょうか」
ダウリュエスの表情が真剣味を帯びる。

「座りなさい」

リオンは静かに椅子に座る。侍女がすぐに二人に茶を持ってくる。侍女が去ると、リオンは意思の強い目でダウリュエスを見る。

「……ごく最近ですが、サラディアの周りでイベルが徘徊していると

の報告がきております」

「イベルか：まずいな」

ダウリュエスは苦い顔をする。

イベル。それはこの世界ではまず生息しない異形の動物たちであり、人に危害を与える凶暴ないきものである。今までは、その姿はサラ王国建国時の記録でしか確認されていない伝説上のものであった。一般的には魔物と呼ばれ、それらがやって来るであろう異世界イベルアのことを魔界と呼んでいた。

ダウリュエスは少し考え、そして姿勢を正してリオンを見た。

「5日後にサラディアの商隊がルーマへと発つとの事だ。それに兵を付けろ」

「かしこまりました」

リオンは席を立って一礼する。

「それと――」

リオンの動きが止まる。ダウリュエスは続けた。

「商隊は工房から出発する。その時にボルスを連れて帰ってきてくれ」

「…はい」

リオンは部屋を去った。ひとりになったダウリュエスは頭を抱えた。

（嫌な予感しかない…）

これから何かとてつもないことが起こる。人の手に負えない程巨大なことが…。体の内側が冷えていくのを感じた。

ルーマとサラディアを結ぶ街道に精霊のクインが立っていた。遠く

にはサラディアを囲む山々が見える。そこにはサラ王国の王である友がいる。

「やっぱりか…」

その声は低く、憂いを秘めていた。クインは力なく笑った。

その視線の先には、巨大な扉がそびえ立っていた。

そして、それがクインの目の前でゆっくりと、ゆっくりと開いていた。

第6話

朝、サラディアの人々が動き出す頃、工房の雑用の者たちはせつせと薪を工房に運んでいく。その中にボルスもいた。たくさんの薪を抱えて走る足取りはしっかりとしていた。

「ん？」

ボルスは足を止める。その前でデンサスが細い路地に入っていた。その横顔はいつになく真剣であった。そろりと歩いていき、デンサスが入っていった路地をのぞく。

「・・・となる。頼んだぞ」

デンサスの声がかすかに聞こえる。話している相手は、建物に隠れてしまつて姿が見えない。

「わかった」

相手は短く答える。二人の雰囲気は深刻な話でもしているかのようになかった。

（デンサス・・・？）

何よりも気になったのは、デンサスの表情だった。いつものような朗らかで、明るいものとは全く違い、厳しく威厳さえ伴っていた。

ふと、デンサスがこちらを見た。ボルスは反射的に顔を引っ込める。

「バレバレだぞ、ボルス」

苦笑いをしながらボルスは顔を出した。そこにはいつものように笑うデンサスがいた。話していた相手も建物の影から顔を出していたが、暗くて良く見えなかった。

「また今度な」

相手に別れを言って、路地から出る。

「人の話を盗み聞きするなんて、やるねえ」

半分持つよ、と言ってボルスの持っている薪を数本取る。

「悪かった。好奇心に勝てなかった」

二人は共に工房へと走る。

「誰と話していたんだ？」

ボルスが何気なく聞くと、デンススは少し考えるような顔をした。

「なんていうのかな・・・仲間、かな？よく助けてくれるんだ」

そう言って笑う。その笑顔は自然で、暖かい笑顔だった。

―本当に信頼しているんだな。

そう、ふと思った。デンススの横顔を見る。

いままで、そのように自然に仲間と呼べる人がいただろうか。サラディアからどこでも見えるサラ城は、自分が生まれた場所である。自分はある場所で王子として育てられた。城にいる人々の目には、ボルスは王子にしか映っていなかった。同じ年の貴族の子供とはよそよそしい関係であり、その間には身分という隔たりがあった。笑い合ったりして、気兼ねなく話せるような人は、サラ城にはいなかった。

「仲間・・・か」

「何たそがれてんだよ。お前も俺の仲間だろう？」

デンススが当たり前と言う言葉に、ボルスは笑う。

「そうだな！」

二人は工房に着く。

「おはよう！」

準備をしていた職人達が二人に声をかける。

「おはようございます!」

ここには、そんな人達がたくさんいる。そして、本当に信頼できる「仲間」が、今自分の隣にいる。城にいた頃は何もしなくて済むような不自由ない生活だったが、ボルスは今までで過ごした中で、この辛いことのいっぱいある今が一番楽しいと素直に思えた。

「あれがボルス・・・ねえ」

そんな様子を遠くで見ている者がいた。ウエーブがかった真っ赤な髪が風で揺れた。

「これは、おもしろそうだねえ」

中心世界イベルアの補佐官、ラドンは口の中で転がしていたキャンディを噛み砕いた。そして、面白そうに目を細めた。

第7話

昼間の日差しの強い中、ボルスは休憩から工房に帰って来た。

ぐっと伸びをして、午後からの仕事に向けて気合いを入れる。工房の中に入ろうとしたとき、護衛を連れた見慣れない服装をした人物が中で工房長と話しているのに気づいた。

「っ?!」

とっさに扉の影に隠れる。

(う、嘘だろ・・・?!なんで?!)

心臓の鼓動が突如早くなり、どっと冷や汗が噴出してくる。ボルスは一発でそれが誰だかわかった。少しウェーブの掛かった、紫がかった黒の髪を持つ者。

(何で兄上がいるんだ?!)

その者は、サラ王国王子リオンにほかならなかった。

ツカツカと足音が聞こえてくる。ボルスの鼓動はピークに達した。そして、すぐそばで足音が止まる。

「貴様の金髪は目立つ。無駄なことをするな」

低い声が振りかかる。恐る恐る声の主の方を見上げた。そこには、冷たいオーラを身にまとったリオンがいた。

「お・・・お久しぶりです、兄上」

ボルスは引きつった顔でとりあえず立って挨拶をした。リオンはその様子を見て軽くため息をつく。

「少しは丈夫になったのか? 父上のなさったことを無意味にするのではないぞ」

「はい・・・」

ボルスはリオンに幼い頃に剣を突きつけられてから彼に恐怖心を抱くようになった。それからはリオンの怒りの琴線には触れないことを誓ってきたため、リオンには逆らうことを絶対しなかったし、自分から積極的に行動しようとも思わなかった。逆にそれがリオンにとって不愉快なことだとは気づかずに・・。

「ボルス――！！」

遠いところからデンサスの非常に場違いな声が聞こえてきた。そこらを見ると、一直線上に小さくデンサスの姿が見える。見間違いでなければ、こちらに走って来ている。走りながらボルスに話す。

「ボルス！聞いてくれ！おれえ・・っと・・」

ようやくボルスのとなりの人物に気づいた。あまりの意外さに凝視する。

「・・っ？！ す、すみませんでした！！」

デンサスは即座に謝り、その場から恐るべきスピードで去った。

「・・」

リオンは無言でいる。ボルスは内心で頭をかかえた。出来るなら今すぐどこかに隠れたかった。

「・・父上が、城に帰るようにとおっしゃった。数日後、商隊がルーマに出発する日にお前を迎えに行く。それまでに帰る仕度しておけ」

「え・・？」

ボルスの戸惑う声を無視して工房長の方に顔を向ける。

「では工房長、また数日後に」

「はい、よろしくお願い致します」

そしてリオンは護衛と共にさっそうと工房を出て行った。

「はあああ・・」

一気に緊張が解ける。腹の底からため息を出した。

「まさか、リオン王太子様がいらっしゃるなんてなあ」

どこからかデンサスがやってきた。

「お前なあ・・・」

ボルスはデンサスを恨めし気に睨む。

「あれは悪かった。いやあ、しかしリオン王太子様はやっぱりかっこいいなあ。俺初めてお会いしたよ」

「え・・・俺、恐怖しか無いけど・・・」

リオンはサラ王国の軍の総監督であり、武術もかなりの腕前であった。王太子ともあって、王国中の特に男性にはあこがれの的だった。

「で？」

ボルスはデンサスが言いかけた所に焦点を当てた。

「おう！そんでな！俺、ルーマへ行く商隊に参加することになったんだ！」

喜びが言葉の一句一句に出てくる。それほどまでにデンサスは嬉しがっていた。

商隊に入ることによって、リスクの高さから報酬が高く出される。数えきれないほどの雑用のなかから選ばれたのは、非常に嬉しいことだった。

「これで当分は食べ物に困ることはない！」

その言葉は非常に重みがあった。貧しい暮らしをしている者の言葉だった。

そして、ボルスも自分の事のように喜んだ。

「お土産よろしくな」

「話だけな！」

二人は笑いあった。

商隊のルーマへの旅はかなり危険である。場合によっては命を落と

すことだってある。しかし、デンススは必ず帰ってくると、ボルスはそう信じていた。

そして、午後の仕事の始まりを知らせる鐘が鳴った。二人はいつものように仕事を始めた。

第8話

昼下がりのサラ城は、落ち着いた、優雅なときが流れていた。

昼の柔らかな日差しが注ぎこむサラ城内の通路を、精霊クインは歩いていた。銀色の髪が光で輝きを増す。

（ダウリュエス、いるかな・・・？）

クインが見た、この世界とイベルアを繋ぐ門の開放について、早急に国王ダウリュエスに知らせたかった。足早に王の居る執務室に向かった。

執務室の前に着き、そこにいた騎士が王の許可を聞きに部屋に入る。

「・・・王様っ!？」

ただならぬ声が扉越しに聞こえた。クインは即座に扉を開けて中に入る。クインの目に入ったのは、床にくしゃくしゃになって散らばった多くの書類と、騎士に支えられながら胸を押さえてうずくまる王の姿だった。

「おいっ、大丈夫か?!」

クインはダウリュエスのところに駆け寄る。ダウリュエスはひどく苦しがつており、声はおろか、息すらもままならない状態だった。汗が彼の頬を伝う。

しばらくして、ようやく落ち着いたのか、肩を大きく上下させて息をするようになった。

「・・・すまない」

ゆっくりと頭を上げて、クインと支えていた騎士に礼を言う。額に浮かんだ汗を拭う。

「大丈夫か？」

「・・・大丈夫だ。・・・急に胸が痛くなった。何か、心臓に剣が刺さったかのようなだった」

ダウリュエスは机にしがみつくようにして立ち上がる。すぐさま騎士が支えに入り、椅子に座った。

「心臓か・・・。心臓は厄介だぞ。歴代の王の何人かもそれに悩まされていた」

サラ王国の建国時から居たクインの言葉は、非常に説得力があった。
「・・・そうだな」

ダウリュエスの顔は真っ青だった。そして騎士を下がらせる。

「それで、話は何だ？」

ばらばらに散らばった書類を集めていたクインが顔を上げる。

「何か、話があつてきたのだろうか？」

「まあ・・・そうだけど・・・」

書類を整えて机に置く。そしてダウリュエスの向かい側に座る。

「お前、“イベルア”の事は知っているよな？」

「まあ、文献に記されていることだけだが・・・」

ダウリュエスの答えにクインは少し考える。そして、腰にぶら下げているポーチから小さな本を取り出した。それをダウリュエスに差し出す。

「これは？」

「イベルアについてできるだけ詳しく記しておいた。これを読んでおいてほしい」

ダウリュエスは驚いた顔をして本を開く。クインは話を続ける。

「サラディアとルーマの間の地域に、この世界とイベルアを結ぶ“扉”がある。その扉が開いたんだ。最近、周辺でイベルの出没が頻繁になっただろう？」

クインの言葉にダウリュエスは目を見開く。

（：ごく最近ですが、サラディアの周りでイベルが徘徊していると報告がきております）

リオンの言葉が脳裏によみがえる。

「：私たちがイベルは防ぎきれるか？」

「イベルは防げる。だが、“イベルアの民”が出てきたら厄介だな」
イベルアの民。文献にはイベルと共に出現する者たちとしか書かれていない。王であるダウリュエスさえその存在については全くと言っていいほど知識がない。

「イベルアの民は・・・という者たちなのか？」

クインは少し考えてから口を開く。

「・・・簡単にいえば、イベルアと様々な世界との均衡を正す存在だ。彼らはイベルを従える力がある。戦うとなると厳しい戦いになるだろうな」

「・・・そうか」

これからのサラ王国をどう守っていくか、守ることができるか・・・。
手から冷や汗が出てきた。

「心臓に負担かけるようなことと言って悪かったな」

「まったくだ・・・」

ダウリュエスは頭を抱えた。

そんなダウリュエスをクインは複雑な思いで見つめる。

クインを含め、精霊たちはこの事態の原因と結果を知っている。だが、それは人間には言うことが禁じられている。人間の耳に入ってしまうえば、事態の結末が違う方に行ってしまうからだ。

「・・・そういえば、第三王子のほうはどうだ？」

「ボルスには城に戻ってもらう。嫌な予感がするからな」

「そうか」

だが、自分がダウリュエスに何もしてやれないとしても、それを示唆することはできる。そのために、自分が伝えられるだけの情報をダウリュエスに渡した。

「一番の問題はイベルアの民がどう出るか・・・だな」

ダウリュエスはそう言って、クインから渡された本を読む。できるだけ相手の事を知るために。

「頼むぞ・・ダウリュエス」

クインはこれから起こる事態の重さを乗せて言う。それは静かな執務室に響いた。

第9話

早朝。サラディアを囲む大きな山脈が朝日によって壮大なシルエツトを描き上げた頃、サラディアの唯一の玄関口につながる山道を巨大な商隊が通っていた。商隊はサラ王国の王家の紋章が描かれた旗を掲げている。王家が直接所有する大規模な商隊である。その先頭には上質な白い羽織をはおった男が馬に乗って進んでいた。

「あとどれくらいかかるか？」

その男は右後方で馬に乗って進んでいた白髪の男に尋ねた。

「正午までには着きます」

「そうか・・・」

先頭の男は柔らかに笑った。

「久しぶりの帰省だからな。・・・父上はどうされているだろうか」道の先のサラディアに視線を向ける。サラ王国第二王子エリユーは澄み渡った紺色の瞳を嬉しそうに細めた。

「兄上とボルスは・・・まあ相変わらずだろうな」

「・・・またやっているのかよ」

工房での作業を終えていつもの積み荷置き場で弁当を食べようとやってきたボルスは、お馴染みの光景にため息を軽く付いた。デンスアを含め、数人が積み荷の隙間から覗いていた。

「前見た女三姉妹が来ているんだよ」

デンスアが手招きをする。ボルスはそれを見無視して積み荷の上に座ろうとする。

「なんだよ！つれないなあ・・・」

ボルスはデンスアの声に仕方なく行く。そして積み荷の隙間からのぞく。

その先には以前も見た、使用人を連れた貴族の三姉妹であった。

（あの使用人・・・）

それは以前と同じ使用人の女性であった。ボルスの視線は三姉妹ではなく、その使用人の方に重点をおく。

「・・・おい、ボルス」

デンススの声が入から降ってくる。

「ん？」

「お前、いざ覗くってなると夢中になっちゃうのか？」

「は？」

「さっきから肩叩いていたのに気づかないからよお！」

「はあ！？叩いていたかお前！？」

ボルスの叫び声に皆はドツと笑う。

「いやあ、人は見た目で判断してはいけないな！」

デンススはボルスの肩に手を置き、大笑いした。

「だれだ？お前の気に入った奴は」

ボルスを無理やり積み荷の隙間に向けさせ、皆も一斉に見る。

「だれだ？」

「気になるなあ」

皆がボルスに急かす。

「えー・・・と」

（どうしよう・・・）

皆の期待の視線を受けて困っていた時であった。

「ウィザード家の三姉妹か。私も気になるな」

「ウィザード家か・・・っ！？」

突然思わぬ声が聞こえた。ボルスを含め、そこにいた全員が驚いて

声の主の方を向く。ボルスにとっては聞き覚えのある声であった。

「あ・・・兄上？」

そこには積み荷から覗いている第二王子エリユーの姿があった。

「何やっているのですか?!」

「何って・・・覗いているに決まっているだろう」

えリユーはあたかも当然のように言い放つ。

「お・・・王子様が覗き・・・」

デンススが小さな声でそう言う。

「そこにいるボルスだって王子だ。別に構わんだろう?それに、兄として弟の将来が心配だからな」

彼はそう言って穏やかに笑った。

(優しそうな顔で、ものすごいことするんだな・・・この王子様は)
デンススを含め、そこにいた全員が同じことを思った。

「何でここにいるのですか?」

「何でって、お前がいたからだ。その金髪はよく目立つからな」
そう言ってボルスの頭を軽く撫でる。

「エリユー様!もう行きますよ!」

白髪で褐の男性が背後からやってきた。

「アシュレイさん!」

「お久しぶりです!ボルス様!」

エリユーの側近である白髪の男性アシュレイは、ボルスに敬礼の姿勢を取る。

エリユーはアシュレイのもとへ行き、ボルスの方を振り返る。

「では、また今度な。ウィザード家のことについても伝えておくぞ」

「いや、それは伝えなくていいです」

ボルスの慌てた表情を見て楽しそうに笑って去っていった。

「・・・」

しばしの沈黙。

「・・・お前の兄上って・・・すげえな」

デンススは沈黙の中、ポツリと呟いた。ボルスは真剣に頭を抱えた。

エリユーの率いる巨大な商隊がサラディアにやってきたという事は、
入れ替わりで出発するサラディアの商隊がまもなくルーマへと発つ
ということを表していた。

第10話

エリユー一行は、貿易品を持った商隊をサラディアの工房にある貿易所に休ませて、サラ城へと向かう。サラ城の正門の前には国王であり、父であるダウリュエスが迎えに来ていた。

「エリユー。良く来てくれた！」

ダウリュエスは笑顔で息子を迎えた。

「お久しぶりでございます。父上」

エリユーも言葉がはずんだ。

二人は執務室に向かった。

サラ王国第二王子エリユーは、サラディアから遠く離れた大陸にある大きな貿易都市スティヴ中心に土地を治めている王子である。

知識に富んでいて、王の居る首都サラディアから遠く離れた、異文化の民も居る地域で分裂を起こさずに統治していた。

「道中は大丈夫だったか？」

「はい、全く問題ありませんでした」

「そうか・・・」

ダウリュエスは少し考える。イベルの目撃情報は、リオンが報告した時から入ってこない。このままサラディアの商隊をルーマへ送っているのか、ダウリュエスは未だに悩んでいた。安全上、商隊を出さないほうが良いのだろうが、サラディアにとって商隊による交易の停止は大きな痛手となる。

山脈に囲まれ、交易の不便な立地であるサラディアにとって商隊は無くってはならない存在である。安全が一番大事であるが、ここで商隊を出さないという決断をすれば、その後いつ商隊を出すことができるか分からない。

「そういえば、リオン兄上はどうされていますか？」

エリユーの問い掛けに顔を上げる。

「ああ、リオンならサラディアの外にいる。イベルが出現したという情報が一回報告されたからな。クインと共にルーマへの道の安全を確認しに行っている」

「これは・・・？」

王太子リオンは目の前にあるものに驚き、隣に居るクインに聞いた。そこは、サラディアを囲む山脈を抜けて、ルーマへと行く街道から少し道が離れたところに存在していた。普通ではありえないほどの巨大な扉が二人の前にそびえ立つ。

「この扉が、イベルが出現する原因。この扉の向こうには、イベルアと呼ばれるこの世界とは別の世界があるんだ。そこからイベルはこの世界に来ている」

クインは扉に近づく。扉は閉ざされていた。

「今は閉ざされているのか・・・。向こう側も良く分からない事をしてくるものだ」

「向こう側とは、“イベルアの民”の事か？」

クインはリオンの方を振り返る。

「ダウリュエスに渡した本を読んだのか？」

リオンは首を縦に振る。

「精霊というのは、どの者もあのようにイベルやイベルア世界のことを詳しく知っているのか？」

「・・・まあね。俺みたいに人の形を成している精霊は大体知っている」

クインは扉の方に顔を向ける。そして軽く扉に触れた。

「イベルは、本来この扉の向こう側の世界に住む生き物だ。そして、このイベルアに通じる扉も本来はこうやって現れるものではない。」
リオンは扉に厳しい視線を送る。

「では、この扉の向こう……イベルア世界で何かが起こっているということなのか？」

クインは首を横にふる。

「そうであれば、こんな扉は現れないさ」

「では、この世界で何かが起こっているということなのか？」

クインは無言でいる。そして、いきなり扉から背を向けて離れていた。

「扉が閉じているということは、イベルは今のところこれ以上は出現しないだろう。俺も今回の商隊について行くから、余程のことが無い限り無事にルーマに行けるだろうな」

クインはサラディアから乗ってきた馬に乗る。

「なぜ、いきなり話をそらす……？」

リオンはすかさずクインに聞いた。

「あなたは何か知っているのだろうか？」

クインはリオンのことを複雑な表情で見つめる。リオンは厳しい顔で真っ向から彼を見つめ返す。

「……俺は精霊だ。人に言って良い事と悪い事がある。これ以上俺の口からは言えない」

それでも大分まずい事を言っているがな。と、クインは少し笑う。

「それより、このような事に王太子たるお前を連れさせたダウリュエスの方が俺は心配だが……」

「……」

そんなクインの言葉に、リオンは一層厳しい顔をした。リオンもそのことには気づいていた。普通、このような事はクイン一人で行くものである。リオンは王太子である以上、滅多なことが無い限りサラディアからは出ることはないのだ。しかし、今回は違った。

（なにか、父上にあるかもしれない。）

リオンはサラディアのある方を見た。

「もう確認もとれたから、戻るか」

そんなリオンを見て、クインは馬の綱をしっかりと持った。

「そうだな」

リオンも扉から離れて、自身の馬に乗る。もう一度扉の方を振り返る。そして、サラディアの方へ戻っていった。

第11話

夜になると、サラディアは昼間のような絶え間なく鉄を叩く音がなくなり、静かな様相を見せていた。工房では、ボルス達雑用が宿舎で床についていた。

ボルスは、ガリガリと何かを削る音で目を覚ました。外を見てもまだ真っ暗である。ベッドの脇には多くの荷物が置かれていた。それは、ルーマへ行く商隊に参加するためのデンサスの荷物であった。明日、彼は商隊と共にルーマへと出発する。

音はボルスの寝るベッドの上段のベッドから聞こえていた。そこはデンサスのベッドである。

「何やっているんだ？」

ボルスは寝たまま上で上にいるデンサスに聞く。すると、上からデンサスの顔が現れた。

「わりいな。起こしちゃったか？」

「うん、起こされた。・・・こんな夜遅くまで起きていて大丈夫なのか？明日出発だろう？」

「大丈夫。もう終わるから」

そう言ってデンサスは頭を引っ込めた。そして再びガリガリと何かを削る音が聞こえてきた。ボルスは再び枕に頭を戻す。

明日、デンサスはルーマへと出発する。そして同時に自分は城へ帰

る事となる。

今までの生活が一気に変化すること不安がよぎった。ボルスは目を閉じて明日からの生活を想像した。

今までの工房生活はデンススと共に生活してきた。時々うるさくてどうしようもなかった時もあったが、彼がいなくなる生活というのも寂しく感じる。

ボルスはそのような事をつらつらと考えながら、そのまま寝入ってしまった。デンススの、何かを削る音がずっと聞こえていた。

ボルスは、自分が森の中を歩いていることに気づいた。

(・・・夢?)

歩いているのは自分のはずなのに、自分の意志では無い。まるで誰かの目線の映像を第三者の立場で見ている感じだった。

目の前に誰かが歩いている。雰囲気からしてデンススであるだろうが、服装がいつもと違っていた。

『一体、どこに行くんだ?』

今ボルスが見ている目線の人物がそう尋ねると、彼はこちらに振り返る。

(やっぱりデンススだ・・・けど)

確かに彼はデンススであるが、ボルスの知っているデンススとは微妙に違う。なんだか、大人になったような姿である。

デンススは無言のまま再び前を向いて歩いて行く。それを不思議に思いながらついていく。

すると、突然森が開けた。どんよりとした雲が見える。そして、前方には古ぼけた大きな家が建っていた。

『ここは?』

一歩その場所に足を踏み入れた。その時、

『ボルス後ろ!!』

誰かが自分の名を叫ぶ。デンススではない、仲間の声だった。

とっさに後ろを振り向いた瞬間、体に衝撃が走る。

(え・・・?)

それを見ていたボルスは驚愕する。

(斬られた・・・?)

『なっ・・・!?!』

映像が流れていく。おそらく斬られた勢いで倒れたのだ。そこに一瞬だけ映ったのは・・。

『どう・・・して?』

巨大な剣を持って立つ、泣きそうな顔をしたデンスラスだった。

第12話

深夜で人々が皆眠りにについている頃、“イベルアの民”のラドンは鍛冶工房のとある屋根の上に座っていた。

「平和だねえ・・・」

何も警戒しないで眠れるこの街を見渡す。彼の言葉には皮肉が込められているように聞こえた。燃えるような真っ赤な髪がそよ風に揺られる。

ザツと後ろから足音が聞こえ、ラドンは振り返った。

そこには、黒いマントを羽織った男が立っていた。

「こんばんは、副指揮官」

ラドンがそう呼ぶ男は厳しい表情をしながらラドンに近づく。漆黒の髪が風に揺れる。

副指揮官デイストス。今は亡きイベルアの統治者であった指揮官に代わって“イベルアの民”を率いる者である。

「・・・準備は整ったか？」

デイストスは静かにラドンに聞く。

「うん、完璧だよ。後はあんた次第だねえ」

「そうか・・・」

ディストスはラドンの横に並ぶ。目の前では、月明かりでほんのりと照らされるサラディアが広がる。

指揮官を失ってから十七年。中心世界イベルアは、もはや死にかけていた。ようやくイベルアの回復に向けて計画を実行することができる。ディストスはサラディアの街を眺めた。

「・・・」

ラドンは彼の顔を見る。そして、苦笑いした。

「お人好しだねえ、副指揮官は」

ディストスは、傍らに座るラドンの方を向く。

「だから俺が行こうかって言ったのに・・・」

そよ風が止み、辺りの時が止まったかのような静寂がサラディアを包み込む。

二人のいる屋根の下には、ボルスたちが眠っていた。

「・・・そのことについては問題ない」

ディストスはそう断言した。

もう、迷っている暇など無い。中心世界イベルアが死にかけている中で、自分がこんな気持ち程度で迷っていたら、すべてを失ってしまう。

「もう・・・止まっている時間は無いんだ」

亡き指揮官が守り続けた中心世界イベルア。そこが死んでしまったら、周りの世界も連動して死んでしまう。一刻も早く“アルフ”を“アルフ”たる者とさせて、イベルアに連れていかなくてはならない。

ディストスは未だに抱える複雑な思いを胸に、これからやってくる朝を待った。

クインは、サラ城の屋上で星を見上げていた。

「・・・明日、かあ」

明日、クインはルーマへ向かう商隊の同行を任されている。

（このようなことを任せてすまない。だが、どうか商隊の皆を守ってくれ）

命令と言うより、懇願であった。今でもあの時のダウリュエスの顔が目に残っている。クインは思わず承諾してしまった。

「・・・ごめん、ダウリュエス」

そうつぶやいてうつむく。

クインは長い間生きている精霊である。今、中心世界イベルアの指揮官の死によって、数多くの世界は窮地に立たされている。また、その中で、クインには自身の存在意義とも言える大きな仕事をこなすことはいけなくなる。

この事態に私情を挟んではいけないのだ。

うつむいていた顔を上げる。

クインは、どうしようもできない葛藤を胸に抱えながら、朝を待った。

第13話：上

「・・・ルス、ボルスっ！」

誰かが自分の名前を呼ぶ声が聞こえて、ボルスは目を開けた。視界がデンサスの顔で埋まる。

「・・・近い」

寝起きの少しかすれた声で一言いって、デンサスを押しのける。

「大丈夫か？ なんだか悪夢でも見ていたような様子だったけど・・・」

のっそりと体を起こす。

「・・・どんな夢だったわけ・・・？」

ものすごく悪い夢だった気がする。しかし、その夢は考えれば考えるほど曖昧なものとなってしまうた。

眉間にシワを寄せて考えるボルスをよそに、デンサスは「よいしょ」と言う掛け声と共に立ち上がって、足元の荷物を持ち上げる。

「もうそろそろで夜明けだから、支度しとけよ」

そう言って、開きっぱなしの部屋のドアから出ていった。部屋にたくさんあった荷物も、もう少なくなっていた。

（・・・そうか。今日出発だったよな）

ボルスにとってあまり来て欲しく無かった日が来てしまった。ベッドから立ち上がって身支度を整え始める。寝間着を脱いで、そばにあった服に手を伸ばす。その服は、今まで来ていた作業服とは比較にならないほど上質な生地できていた。ところどころに施されている刺繍も光沢感のある豪華なものだった。

その服は、この鍛冶工房で働くまでは当たり前前に着ていたものだった。あの時は着ていて当然のような気でいたが、今見るとどれだけ裕福な環境に居たかがよく分かる。

服を着て長い髪を縛った時、デンサスが残りの荷物を取りに部屋に戻ってきた。

「おお……。そう言えば、お前は王子だったな」

新鮮な物を見るような視線でボルスを見る。

「そう言えばって……。どうせ王子に見えないよ、俺は」

ボルスは苦笑した。そしてデンサスが持ち切れない荷物を持つ。そして二人は部屋を出た。

「・・俺はボルスが王子で良いと思うぞ」

狭い階段を降りている時に、デンサスが唐突に言った。

「は？何て言った？」

重い荷物を抱えながら慎重に階段を降りているボルスは聞き返す。

「ボルスみたいな王子がいて良いと思うぞ！」

今度は大きな声でボルスに言う。

「え……。いや、王子に見えない王子はマズいよ」

唐突な言葉に慌てた。

リオンのように武芸に秀でているわけでもなく、エリユーのように博識でもない。ボルスは自分に何もできることが無い事に悩んでいた。そんな自分を変えようとしているが、いつも一歩先に進めなかった。そんな自分にいつもどこかしさを感じていた。

先に階段を降り切ったデンサスは、一旦荷物を下ろす。そして後から降りてきたボルスのことを見た。

「そりゃあ、ボルスはリオン王太子様やエリユー王子様には到底追いつかないだろうな。お前意気地無しだしよ」

「ま、まあ……。そうだけど」

ストレートに言われると、ますます落ち込むな。などと思い、ボルスは苦笑いをした。持っていた荷物を下ろす。空が次第に明るくなり、周りを取り囲んでいた暗闇が徐々に薄れてきた。

「でもさ、ボルスはこの工房でいろんな奴と仲良くなっただろ？俺みたいな下層市民ばかりのところだ。王子様がそうそう出来ることじゃないと俺は思う」

ボルスはデンサスの顔を見る。デンサスは穏やかな表情であった。

気のせいか、その表情はかすかに悲しみを帯びていた。デンススは荷物を再び持ち上げる。

「リオン王太子様やエリユー王子様は確かに素晴らしい方々だけだよ、俺から見るとボルスも負けちゃいないと思うぞ」

そう言っただけを歩いていった。恥ずかしそうに頭をかきながら。

「・・・」

その姿を呆然と眺める。

自分のことをそのように言ってくれる人物は他にいなかった。純粹に嬉しかった。しかし、ボルスはそれ以上に気にかかった事があった。

どうして今、そんなことを言うのだろうか。

ルーマへの商隊は、ルーマで何日も滞在しないでサラディアに戻ってくる。遅くとも20日で帰ってくるのである。

（それなのに、どうしてあんな事を言うのだろう・・・？まるで・・・）

「おい！早く来いよ、ボルス！」

デンススはいつもの大声でボルスを呼ぶ。

「あ、悪い！」

ボルスは慌てて荷物を持って、デンススのところへ走っていった。

第13話：下

朝日が昇り、いまだにしっとりとした空気が流れる頃、サラディ
アはいつもよりもにぎやかな朝となっていた。鍛冶工房地帯の前で、
商隊に参加する者たちが集まっている。工房の者たちや、サラディ
アの街の人々が見送りに来ていた。その中にボルスとデンスアがい
た。

「そうだ、ボルス」

「ん？」

いきなりデンスアがゴソゴソとポケットの中から何かを探し始める。
そして何か小さな物を取り出した。

「はい」

そう言って差し出したものは、親指ほどの大きさの、銀でできた不
思議な形をしたコルクだった。

「なんだ、これ？」

ボルスはそのコルクを持ってよく見る。雫しずくのような形をしたコルク
の先端には、何かを挿し込むような穴があった。その表面には細か
な装飾が施されている。

「お守り。徹夜で作ったんだ」

「昨日の音は、これだったのか」

ボルスは、デンスアが昨夜遅くまでガリガリと何かを削っていた音
を思い出した。

「・・・でも、なんで？ どうせすぐ戻ってくるだろう？」

「お前、今日から城生活だろ？ 戻って来ても会うことなんてあまり
無いだろうからさ」

デンスアの言葉にボルスは表情を曇らせた。手の中にあるコルクに
視線を落とす。

（そうだった・・・もういつものように、デンスアや工房の皆と会
うことが無くなってしまおうんだ）

すると、さっきまでとは違うざわめきが起こり始めた。人々がサラ城からやってきた者たちに道を開ける。その道を堂々たる姿で歩いてくるのは、騎士を連れた王太子リオンだった。そして、彼のすぐ後ろには第二王子のエリユーとクインがいた。そこにいた人々は皆頭を下げる。

「すごい・・リオン様とエリユー様が同時にいらっしやるなんて・・」

ボルスの後ろにいた工房仲間が小声で話している。ボルスは二人の兄の姿を見た。リオンが商隊長と話している傍らで、エリユーが商隊に参加する者たちに激励の言葉をかける。エリユーは、サラ王国の主な貿易を任されている、いわば商業界のトップだ。商隊の者たちにとって彼の存在は大きいものだった。

「彼が今回商隊の護衛を担当するクインだ」

リオンが紹介するとクインが前に出る。

「よろしくお願い致します」

クインは優しく微笑む。そして商隊長と力強く握手をした。

「今回は最新の注意を払ってルーマに行ってくれ。決して無理はしないように」

リオンの鋭い瞳がクインと商隊長を見つめる。

「無事にこのサラディアに帰って来る事を願っているぞ」

とうとう商隊がサラディアを発つ時が来た。

「気をつけろよ」

ボルスは心配そうにデンサスを見る。そんな顔を見てデンサスは笑った。

「なにいつてんだよ。この俺だぞ！死んだりなんかしねえって！」
商隊が進み始めた。デンサスは満面の笑みでボルスたちに手を振る。工房の仲間たちは門を抜けて商業都市ルーマへと向かう商隊に手を振り続けた。

ボルスは不安気な表情で商隊を見送った。

「あ、いたいた」

背後から声がして、ボルスは振り返る。そこにはエリユーがいた。

「見送りは出来たかい？」

「はい」

すると工房仲間たちがボルスの所にやってきた。まずエリユーに頭を下げる。

「ボルスも城に戻るんだろ？」

「一気に二人もいなくなるから、なんか寂しくなるな」

「向こうでもがんばれよ」

「俺達応援しているから！」

様々な言葉を送られる。デンススだったら分かるが、まさか自分もこんなに見送られるなんて予想もつかなかった。

「人気者で何よりだ」

エリユーはその様子を微笑みながら見守る。

「行くぞ」

リオンがやってきてボルスとエリユーに声を掛ける。

「ありがとう。また、会おうな」

ボルスは笑顔で別れを言って二人の兄についていった。

サラディアとルーマを結ぶ道から少し離れた所にある草原。そこにはこの世界と中心世界イベルアを結ぶ大きな扉がそびえ立っている。扉は未だ閉ざされていた。

「さて・・・」

その扉の前に“イベルアの民”の補佐官ラドンが立っていた。

「そろそろかな？」

すると、閉ざされていた扉がゆっくりと開き始めた。扉の向こう側

には大勢の“イベルアの民”と異形の姿をしたイベル達が出た。

「ようこそ、サラ国へ」

ラドンはニヤリと笑い、彼らを歓迎した。

扉から見える中心世界イベルアは、どんよりとした雲に覆われ、青々と茂っていた植物達は無残に枯れていた。そこは生き物の住めるような世界では無くなりつつあった。

第14話

どんよりとした雲の広がる中、ボルスはサラ城の広々とした空中回廊を一人歩いていた。

（こうやって城に帰ってきたはいいいけどなあ・・・）

眼下に広がるサラディアを眺める。乾いた風が金色の髪をたなびかせる。左耳に付いている大きな金のリングピアスが揺れた。

この間までの工房生活がもう懐かしく感じた。城での生活は、サラディアの生活とは程遠いものである。

（何か、俺にやることは無いかな・・・？）

長い工房生活の中で、ボルスは色々なものを見てきた。

工房での仕事は、重労働故に普通の市民はそこで働こうとは思えなかった。繁栄の絶頂期であるサラ王国では、他にも色々な職があるからだ。工房で働くのは、主に身分の低い市民か出稼ぎに来た者くらいであった。

ボルスは、そのような身分の低い彼らの生活を知った。

右手をズボンのポケットに入れ、そこからデンサスからもらった銀のコルクを取り出した。

（皆のために・・・か）

「ボルス様！」

突然名を呼ばれ声のした方に顔を向けると、そこにいたのは兄エリユーの側近を長年務めているアシュレイであった。褐色の肌に白髪を持つ彼は、サラ城の中でもかなり目立っている。

「エリユー様がお呼びです」

「兄上が？」

ボルスはきょとんとした顔をしたが、とりあえずアシュレイについていく。

やって来たところは書館だった。そこは、王族や王国の重要な地位にいる大臣しか入ることのできない所であった。

「お、来たか」

そこで本を詠んでいた第二王子エリユーは顔を上げる。読んでいた本を閉じて机に置いた。

「……」

その本の題名に二人は同じような顔をした。

「……料理でも始めるのですか？」

「なんだ？今更私の趣味に気づいたか？」

「冗談を真面目に言わないでください！」

アシュレイの澄んだ声が書館中に響き渡った。

「……暇なのですか」

よくこの書館でこんな本を見つけましたね、と言ってボルスはその本をパラパラめくる。

「お前には言われたくないな」

エリユーに促されて、ボルスは彼の向かい側に座った。

ボルスが座ると、エリユーは懷から小さな本を取り出した。そして机に置く。

「クインが書いた、精霊やイベル、イベルアについての本だ。先ほど兄上から『ボルスと見るように』と渡されたのだ」

「リオン兄上が？」

少し意外だった。

「そうだ。……全く、私がいなくなってから少しは改善したかと思っていたが、全然変わっていないじゃないか」

兄上も兄上だな……。エリユーは大きくため息をついた。アシュレイがボルスたちに茶を持ってくる。

「アシュレイ、お前も聞いておきな。今後役に立つかもしれないから」

エリユーは机に茶を置いて去ろうとする彼を呼び止めた。

「俺なんかが聞いてよろしいのでしょうか？」

「かまわないだろう」

エリユーは立ち上がり、彼の腕を引っ張って強制的に椅子に座らせる。

ボルスは机に置いてある小さな本を見た。

（イベル、イベルアについての本・・・か）

その単語は、昔に教わったことがある。それは、決して良い意味ではない単語だ。

「今これを知っておくべきだ、と言うことですか・・・？」

顔の筋肉が強ばってくるのが分かる。今、このような事を知るべきだということは・・・

「・・・リオン兄上は今、軍事会議に出ているのだよ」

その言葉を聞き、一気に体に緊張が走った。

「・・・じゃあ、このような時に商隊をルーマに出したのですか？」

「・・・まあ、出すなという方がサラディアの人々にとっては酷だろう。ルーマと違ってサラディアは、何10万・何100万人もの人が暮らすには適さない場所にあるんだ。商隊が運んでくる物資がサラディアの生命線だ。それを絶やす事はそうそう出来るものではない」

「・・・そうですが・・・」

エリユーの言葉に何も反発出来なかった。ボルスはポケットに入っている、デンサスからもらった銀のコルクに触れた。エリユーの隣で座っているアシュレイが、心配そうにボルスを見る。

「商隊にはクインも同行しているから、大丈夫だろう。な、アシュレイ」

「あ・・・はい！」

その力強い声にボルスの緊張が少し和らいだ。銀のコルクから手を離す。

「よし、早速この本を見ていこう」
エリユーは小さな本を手に取り、ゆっくりと開いた。

空一面を覆う雲の下で、巨大な山脈を抜けた商隊は足を休ませていた。

「・・・」

デンサスは一人商隊から離れて、そびえ立つ山脈の方を向いて立っていた。冷たい山風が吹き抜けていく。

「どうしたんだ？もうそろそろ出発するぞ」

背後から声をかけられて振り返ってみると、銀色の髪と長く尖った耳を持つ精霊がいた。この商隊を護衛しているクインだった。

「いえ・・・別に」

曖昧に答えたデンサスを見て、その精霊は笑った。

「ボルスが気になるか？」

「え？」

「あいつと仲良かったのだろう？」

クインは目の前の山々を見上げる。

「・・・無事にサラディアに帰ったら、真っ先にボルスの所に行けよ」

「・・・」

デンサスは無言でいた。

突然、大きな影が二人を覆った。

「!？」

クインは即座に上を見上げた。二人の頭上を巨大な物体がものすごい速さで飛んでいった。

「イベルかっ！」

クインは商隊の居るところへすぐに戻る。デンサスもそれに続いた。

そのイベルは、商隊のところに降りようとしていた。

クインは、商隊を守るようにイベルと対峙した。

「これは、これは……。なんとも意外だねえ」

イベルの背中から誰かが降りてきた。その者は燃えるような真っ赤な髪をした男だった。

「“イベルアの民”だ！」

商隊の人々は、その存在を見てざわめく。周りにいた騎士たちが一斉に商隊を囲んで構えた。

「ラドンか……」

クインは正面の相手を鋭い眼光で見据える。

「クイン様……あなたの様な方が、人間を守るために俺たち“イベルアの民”と対峙するとは……堕ちたものですねえ」

クインの表情が厳しくなる。

「イベルアのために、この人間達には犠牲になってもらうよ」

ラドンはニヤリと笑った。その背後に続々と“イベルアの民”が姿を表した。

デンススは、怯え戸惑う商隊の人々の中で、ただ黙ってその様子を見ていた。冷たい汗が、こめかみを伝うのを感じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8453t/>

Arf～アルフ～

2011年12月13日21時49分発行